雜報

第十九回經濟研究會

十一月二日（火）午後二時　於經濟學部研究室

發表者　西川良一助教授

題「商業利潤について」

出席者

中西、小松、黑松、岩根、小野、岡谷、逆井、辻

早春四月初め明德館研究室の落成を俟つて、住み馴れた圖書館四階の舊研究室から、多くの希望と抱負をもつて、引越して來た。何事にも不足勝ちな私學の現狀の中で少しでも、こうした研究體制を整えて行き、それに依つて、好い研究成果を生み出すことは、獨り、教授の側からのみでなく、學生の爲にも、又、我が國の學界の爲にも、誠に喜ばしいものである。文化國家を、うたつている今、こうした中から一滴〳〵と泌じみ出る研究成果のエッセンスは、積つて科學の美しい結晶の華となるであらう。更に、教授陣の充實と研究意欲の旺盛さは、この樣な研究室でも不足となり、七月中旬から内部の改造が企圖されて、外國雜誌室、資料室、教授合同研究室、事務室の增設となり、十月末で一應の完成をみた。この樣な增設の各部室は直ちに研究活動、及び、事務處理能事化の爲に利用され、合同研究室の如きは殆んど連日、各研究會に使用されている。

こうした狀況の中で、設備不充分の爲に、とかく、とだえ勝だつた經濟研究會も直ちに開かれ、活潑な研究討論が行われた事は新しい研究室での研究活動の最初の足跡として誠に意義あることゝ思う。

こゝに、西川助教授の言葉をかりて研究發表課題の概略を示して見よう。

「商業經濟論の内容とするものは、利潤に關する產業生產資本と商業流通資本の運動と相關々係の諸分析である。この分析は商業經濟における理論的分野の最も肝要な問題であり中心課題でもある。そして特に、この點においては、資本論の第三卷經濟學批判における「商業利潤」に研究の視點を注がなければならない。しかも、この點については、ローザ・ルクセンブルグの批判的解釋が下されているように、多くの疑點と問題を潛めている所であつて、私も亦、疑問を抱き、特に、その中の一つである產業資本に商業資本が加わり利潤率、いわゆる平均利潤率が低下して行く割合において、更に流通費用を商業資本として加えて行く場合に平均利潤は少くなるわけであるが、その流通費用の剩餘價値および商業資本に對する操作が問題となつている點について述べて見たのである。そして、更に、商業經濟論が、この問題に論及するまでには、それ自體として商業經濟論の中心課題が幾多の變遷と解決とを經て辿りついたものであ

ることを商業經濟論の把握の方法としての色々の定義、概念規定の變遷を通じて述べたものである」と。

この樣な西川助教授の論旨を中心にして、發表後、「商業利潤」そのものゝ範疇の問題から端を發して、各研究部門を擔當する教授間で、熱心な討論と研究が、具體的問題にまで觸れて行われて行つた。

こうして、新しい研究設備の中での研究會が誠に熱心に、しかも和やかに、經過して行つた事は、我々の研究活動の前途に明るい曙光を投げかけたものとして喜ばしい限りである。

經濟學會大會

昭和二十九年度經濟學會秋季大會は、十一月十八日午後一時明德館二十一番教室で開かれた。第十九回經濟研究會を有意義に過した我々は更に餘勢を秋季大會に向けた。教授學生が多數參加しその貴重な學術講演を聽講することの出來た事は誠に近來にない收獲と云わねばならない。

當日は、今西正雄教授の開會の挨拶に續いて、講師小松幸雄教授の「わが國農村工業の系譜」と題する、教授の長年に亘る此の方面の實際的研究を基として、その研究の一端を紹介して頂いたのである。同教授の實證研究の勞もさることながら、それに鋭い解剖のメスを入れられ、我が國農村工業の一面を我々の前に曝して頂いた事は、獨り問題は、これに止まらず、我が國の學術研究の一歩前進として、深い感銘を與えたものであつた。

今、こゝに同教授にこの講演の要約を頂いて、貴重な御研究の跡を辿つて見たいと思う。

「農村工業の概念は多岐多端で、これを各國各時代に妥當する定義を設定することは困難である。時代々々の推移によつてこれの意味する內容は變化して行くが、こゝに紹介するわが國農村工業は近世歐州經濟史上問題とされた、つまり、英國の產業革命前期に於ける農村工業としての毛織物工業等を指す意味に於ての農村工業であり、これをわが國の近世に於ける先進地域たる泉南地區における綿織工業を對置する。

封建時代より農家の副業として發達したこの地域の綿織工業は、

第一期　農家々內工業時代（江戸末期—明治廿年頃まで）
第二期　問屋制家內工業時代（出機制度時代—明治廿年—四十年頃まで）
第三期　工場制工業時代（明治四十年以降）

と劃期づけが可能である。

泉南の農家の三分の二が明治初期において家內工業として、副業的に製織したものが問屋制家內工業として、問屋資本の支配下に立たされるに至る契機は唐糸と稱する輸入機械紡績糸—後にはわが國產による機械紡績糸の使用の普及と、今一つは製織機の改良による太鼓機の普及である。この兩者を通じての問屋資本の農家支配は急速に進んだのであつて、出機制度時代として一時期を劃した。たゞこゝで問題なのは英國の農村に於ける毛織物工業は農村地主の中から產業資本としてのマヌユフア

クテューアが發達していつたに對し、わが國その中泉南地區に於ては、地主は己に寄生地主として合理的科學的な企業者意識もたず、高率小作料の上に休眠する階級へと退化したため、マヌユアフアクチューアは問屋資本の支配する分散マニユが壓倒的であつた。こゝでは農業生産關係が舊いまゝに溫存されて而も農家の生計補充的勞賃收入獲得を目的とする勞働機構は、最も廉價勞働力を提供し得る。かゝる極度に廉價な勞働力を使用する所では機械設備の改良には關心はもたれぬ。こゝでは問屋資本の産業資本への轉地は容易でない。

たゞ右の分散マニユが、零細乍らも工場制工業として、動力を使ひうるに至つたのは、日露戰以后の貿易の進出、市場の擴大を契機として、産業革命が遂行された。これも汽力による動力機でなく、電力によるものであり、後進資本主義國の倒逆性を示した。而もこの倒逆性はわが國産業靜命の主導性は、封建藩主國家資本乃至による輸入機械による産業に握られたもので決してわが農村工業から自生的に展開されたのではなかつた。この輸入機械工業の直接關接國家の保護助長に負ふ産業の急速な壓迫は、又在來の農村工業から發展した零細工場制工業の發達を抑壓せざるを得ず、彼等を下請的關係に於て支配するに至る。この下請支配關係を通じて農村の廉價勞働力收奪に參加する譯であり、かゝる關係に於ては産業資本も本格的な性格を打ち出すことは困難である。結局農村の勞働力を正當に評價し得ない機構の下では、資本主義制度そのものが歪曲され典型的に發展し難い傾向を帶びる」と。

講演終つて黑松嚴教授に代表して頂いて、閉會の辭の中で、小松教授の、此の研究に、深甚の感謝の意を表して頂いたのである。